

岩 渡

中国語辞典

倉石武四郎著

岩 波
中国語辞典

倉石武四郎著

岩 波 書 店

は し が き

広義に言えば、中国語の辞典は、Ēryǎ(尔雅)にはじまる。それは、おそくも西洋紀元前二百年前後にまとめられたもので、中国の古典にみえる語彙を、その訓詁によって類集し、特に、釈詁・釈訓など比較的一般化した語彙をあつめた部分のほか、釈親・釈宮・釈山・釈獸など特殊語彙をあつめた部分があり、後者は、のちの“類書”につらなるものがある。ややおくれ、西洋紀元ごろ、Yáng Xióng(楊雄)の Fāngyán(方言)があらわれ、はやくも多数の方言語彙を採集した。

紀元後百年に完成した Xǔ Shèn(許慎)の Shuōwénjiězì(說文解字)は、中国語を表記する漢字の“字書”として劃期的なものであり、9353の漢字を、その偏旁によって540部に分類し、これから以後、中国語の“字典”といえ、いちおうこの形式を襲用した。偏旁による部の数は次第に簡略化されたが、十七世紀に編集された Kāngxī zìdiǎn(康熙字典)は、この系統の字典の集大成であって、わが漢和字典の範ともなった。

さらにおくれ、韻文創作の必要に応じ、漢字をその音韻によって分類した“韻書”があらわれ、紀元七世紀のはじめ、Lù Fǎyán(陸法言)の Qièyùn(切韻)にいたって、それらを集成した。それは、まず、母音と四声とによって、およそ二百余の韻に分類し、さらに、頭子音によって細分したもので、中国語の音韻組織は、はじめて体系的に説明された。それらは、のちに、子音の系列による分類に改編されたこともあるが、押韻の関係からいって、直接 Qièyùn をうけた十世紀の Guǎngyùn(廣韻)などが、ながく典拠とされた。これが、かつてわが漢詩作者のあいだにもおこなわれた百六韻の源流である。

十九世紀以後、西洋の学術がさかんに輸入され、中国の言語にも、かつてみない変化がおこった。このような事情に対処して、当時新文化提唱の中心であった Shànghǎi(上海)の Shāngwù yìnshūguǎn(商務印書館)では、Lù Ērkuí(陸尔奎)ほか数十人の協力によって Cíyuán(辞源)を編集し、1915年これを刊行した。それは、いちおう“字典”の体をとっているが、それぞれの文字を“おや字”とした熟語をあつめ、“辞典”ないしは百科全書の用をなすことを主とし、当時としては劃期的なものであった。

一方、文学革命以来のあたらしい思潮は、中国の言語についても、従来の文語偏重の弊をあらため、逐次、重点を口語におきかえたため、やがて、これに即応する“辞典”が企画され、Wāng Yí(汪怡)を主任とする Zhōngguó dàcídiǎn(中国大辞典)の編纂所がひらかれた。dàcídiǎn そのものは、不幸にして完成をみななかったが、その縮小されたものとして、Guóyǔ cídiǎn(国語辞典)が1945年までに逐次刊行された。1957年に出版された Hànyǔ cídiǎn(漢語詞典)は、この辞典を一部修訂したものである。これらは、従来にない特色として、“おや字”のもとにあつめられた熟語に、標準語音による音標をくわえてあり、その熟語も、いわゆる旧小説や戯曲など、あたらしい資料から摘出されたものがおおい。現に、中華人民共和国の kēxuéyuàn(科学院)の yǔyányánjiūsuǒ(語言研究所)で編集中の Xiàndài hànyǔ cídiǎn(現代漢語辞典)も、その系統に属し、さらに“字典”より“辞典”へのみちをすすもうとしている。

これよりさき、現在この yǔyányánjiūsuǒ の所員である Lù Zhìwéi(陆志韦)先生は、はやくから Běijīng(北京)語単音詞の収集をこころざし、ほとんど十五年の歳月をついやして、Běijīnghuà dānyīncí cíhuì(北京話単音詞詞匯)を編集し、1951年その初版をおお

やけにされた。ここに公刊する岩波中国語辞典の骨幹をなすものは、実にこの *cíhuì* である。

この *cíhuì* は、その名称のしめすように、*běijīnghuà* のうち、単音節で一語となりうるものすべて六千余種を集録した貴重な研究であり、いまなお単音節語的な性格を多分に保有している中国語においては、もっとも基礎的な作業である。われわれは *Lù Zhìwéi* 先生の許諾をえて、この資料を、ほとんど全面的にとり入れ、これに、*Běijīng* 出身の作家 *Lǎoshě* (老舍) 先生のおびただしい作品のなかから採集した語彙をくわえ、さらに、1958年出版の *Hànyǔ pīnyīn cíhuì* (汉语拼音詞匯) から最近の語彙を補充した。一方、東京大学講師 *Lí Bō* (黎波) 先生から、多年にわたって多数の口頭語彙を提供されたが、その大部分は従来のどの辞典にも著録されなかったものである。こうして、われわれは、現代の、*Běijīng* で使用される、みみできいてわかる語彙は、相当程度、網羅することができたと信ずる。

われわれの辞典は、これらの語彙を、現在の中国においてひろく実施されている *hànyǔ pīnyīn fāng'àn* (汉语拼音方案) のつづりかたによって、完全にローマ字順に排列した。もちろん、これに応ずる漢字は、ローマ字のあとに記載されているが、いわゆる漢字の“おや字”をたてる方式とは全然ことになっている。また、その語彙には、それぞれ品詞とランクとをしめし、それが、どのような文のなかでどのような位置にあらわれるかを例文のかたちで説明した。それらは、すべて“辞典”の性格を徹底させたものであり、つとめて“字典”ないし“事典”と区別した。もとより“辞典”が同時に“字典”であり、また“事典”であることは、さしつかえないばかりか、あるいは、のぞましいことでもある。その意味で、この辞典には、“漢字による索引”と“意味による索引”とをそなえ、“字典”ないし“類書”に転用するみちをひらいた。

このような辞典は、これまで、日本にはもとより、中国にも存在しない。ただ、1957年、ソ連のイサエンコ氏によって公刊された *Pīnyīn hàn-è cídiǎn shìbiān* (拼音汉俄辞典試編) がややこれにちかい意図をもっているが、それも、この辞典の前身である“ラテン化新文字による中国語辞典”の一部が印行されたのちに出版されており、その規模も、はるかにちいさい。

中国の文化は、数千年の歴史をになって、脈脈として今日につたえられ、その言語は、現に、九百万平方キロの地域にわたり、六億の人民によって使用されている。自然、中国語の語彙は、けっして、この辞典の範囲にとどまらない。この意味でわれわれは、この辞典を将来にわたって修訂増補するとともに、ひろく中国をふくむ世界各国の学者の協力によって、(1) 地方語の辞典、(2) 口語系統の古語辞典、(3) 文語系統の古語辞典、および(4) それぞれの専門による特殊語彙辞典などが、陸續編集され、またそれが一日もはやく完成されることを熱望し、また期待するものである。

1963年5月

倉石武四郎

序 説

中国語とは

§1 中国には、すべて 52 の民族があって、それぞれの言語をもっているが、なかでも漢民族はその絶対多数をしめ、全人口の 94~95% にのぼっている。ここにいう中国語とは、すなわち漢民族の言語をさす。ただ、おなじ漢民族の言語といっても、地方によって方言の差がはげしく、たとえば広東・福建などの言語は、他の地方人には全然通じなかった。しかし、中国全土を一つの協同体とする意識がたかまるにつれ、全国に共通する言語が自然に発生し、また、政策としてこれを育成普及した。特に中華人民共和国が成立してから、この点に努力をかさねた結果、はやくも今日では、全国共通語がおどろくべき速さをもって浸透している。この共通語は、歴史的なつながりからいっても、また現在の政治機構からいっても、当然、北京語を基幹とするものであり、また、でなくてはならない。すでに 1955 年 10 月には「全国文字改革会議」のあとを承けて、「現代漢語規範問題学術会議」がひらかれ、共通語の問題が真剣に討議された。ただ、なんといっても、時日があさくことであり、完全な「規範」化にはまだ到達していない。

§2 われわれの中国語辞典は、この意味で、中国語のうち、(イ)現代の、(ロ)北京で使用される、(ハ)耳できいてわかる語彙を収録した。中国語はながい歴史をもち、また広い地域にわたっている。したがって、これらが無制限に採集することは、不可能でもあり、また辞典としての条理が失われやすい。それが(イ)現代の、そして(ロ)北京で使用されるものに限った理由である。また中国では、ながい歴史のひずみから、話しことばと書きことばとのあいだに、おおきな開きができ、耳できいては理解しにくいことばが、文字の力で流通している。それも、一種の言語ではあろうが、耳できいてわかることばとは、おのずから別の体系をもち、おおくは過去の言語を反映している。そこで、われわれは、これをも度外視した。といって、われわれの選んだ語彙はすなわち共通語ではない。もとより共通語として成熟した語彙は、つとめて収録したが、現代の北京には、共通語といえない方言語彙が相当に存在しており、これを無視するときは共通語そのものの基盤ははっきりしないばかりか、現在のところでは、共通語と北京方言とを区別する規準もたっていない。自然、われわれが採集した語彙は、まったく客観的な記述によるもので、中国語の「規範」化とは直接なつながりがない。

中国語の発音

§3 中国語は、ふるくから単音節語的な構造をもち、一つの音節によって一つの意味をしめした。“おおきい”ことを dà といい、“やま”を shān というような例は無数にある。したがって、その dà を「大」の字でうけとめ、shān を「山」の字でうけとめれば、一つの音節(発音そのものとしての音節)によってしめされた一つの意味は、また一つの文字によって記録される。これは、きわめて自然であり、しかも便利な方法である。しかし、このような文字は、主として意味に直結していたので、音節または音節の構成成分をうつすための表記法が発達しなかった。それが考案されたのは、中国人が西洋のアルファベット、または日本のかな文字に接して以後のことであるが、それより数えて、ほとんど 70 年にちかく、1957 年 11 月、現在の「漢語拼音方案」^[註]が決定された。

[註] 中国語の音標文字による綴りかた。

§4 「漢語拼音方案」はローマ字を利用したものであって、(1)「字母表」、(2)「声母表」、(3)「韵母表」、(4)「声調符号」、(5)「隔音符号」から成っている。

(1) 「字母表」 26 のアルファベットとその呼びかたを示したもので、26 文字のうち、v だけは普通に使用しない。

(2) 「声母表」 中国語の音節のあたりに現われる子音の表記法を示したもので、

b, p, m, f; d, t, n, l; g, k, h; j, q, x; zh, ch, sh, r; z, c, s

の 21 種ある。

- (3) 「韵母表」 中国語の音節のうち、音節のあたりに現われる子音を除いた部分の表記法を示したもので、およそ

	a	o	e	ai	ei	ao	ou	an	en	ang	eng	ong
i	ia		ie			iao	iou	ian	in	iang	ing	iong
u	ua	uo		uai	uei			uan	uen	uang	ueng	
ü			üe					üan	ün			

の 35 種ある。すべて、中国語の音節は、原則として、この「韵母」のどれか一つだけか、または「声母」のどれか一つと「韵母」のどれか一つとの組みあわせによって成りたっているのである。また、中国語のほとんどすべての音節は、原則として「声調」をもち、それには、意味の分別を示すはたらきがある。

- (4) 「声調符号」 北京語における 4 種の「声調」のつけかたを示したもので、

陰 平 陽 平 上 声 去 声
 — / \ \

の記号は、それぞれその音節の主要な母音(主母音)の上につけられる。

- (5) 「隔音符号」 音節が a, o, e で始まるばあい、それが他の音節の直後に来ると、音節の切れめがわからなくなるので、たとえば pi(皮) ao(扶) は piao と綴らずに、pi と ao とのあいだに ' を加えて、pi'ao のようにする。

§ 5 以上のほか、「韵母表」には次の注意がついている。

- (1) zhi, chi, shi, ri; zi, ci, si の 7 音節に用いられた i は、その他の i とは性質がおなじでないが、他とまぎれるおそれがないため、i で示しておく。
- (2) 「儿童」というばあいの「儿」は er と綴り、自然「儿童」は ertong と綴るが、このように音節として独立したばあいだけでなく、他の音節のあとに付いたときの「儿」は huar(花儿)のように r だけで示す。
- (3) 間投詞の [ɛ] または、これに準ずる音は, ê を用いる。
- (4) i が最初に出る「韵母」、すなわち i, ia, ie, iao, iou, ian, in, iang, ing, iong は、前に「声母」のないときには、それぞれ, yi, ya, ye, yao, you, yan, yin, yang, ying, yong と綴る。u が最初に出る「韵母」、すなわち u, ua, uo, uai, uei, uan, uen, uang, ueng は、前に「声母」のないときには、それぞれ, wu, wa, wo, wai, wei, wan, wen, wang, weng と綴る。ü が最初に出る「韵母」、すなわち ü, üe, üan, ün は、前に「声母」のないときには、それぞれ, yu, yue, yuan, yun と綴り、いずれも ü の上の点を省略する。また ü, üe, üan, ün が「声母」j, q, x と組みあわされたときは, ju, jue, juan, jun; qu, que, quan, qun; xu, xue, xuan, xun と綴って、これまた ü の上の点を省略する。ただ「声母」n, l と組みあわされるときだけは, nü, nüe; lü, lüe, lüan, lün のように, ü のままの形をとる。
- (5) 「韵母」iou, uei, uen が「声母」と組みあわされるときは, miu, diu, niu, liu, jiu, qiu, xiu; dui, tui, gui, kui, hui, zhui, chui, shui, rui, zui, cui, sui; dun, tun, lun, gun, kun, hun, zhun, chun, shun, run, zun, cun, sun のように綴って, o, e を省略する。
- (6) ローマ字を漢字のルビにするときは、長さの関係から, zh を ż, ch を ç, sh を š, ng を ŋ としてもよい。

この辞典のローマ字表記は、完全にこの「方案」にしたがっているが、たとえば「椅子」の「子」などは「花儿」の「儿」にならって、yiz のように、z だけで示した。

§6 「漢語拼音方案」の「韻母表」の横の第1行には、

- (1) 単母音, すなわち, a, o, e(ê)
- (2) 単母音に -i, -o, -u を加えたもの, すなわち, ai, ei, ao, ou
- (3) 単母音に -n, -ng を加えたもの, すなわち, an, en, ang, eng, ong

が排列され、第2行には、

(4) i, および i を最初にもつもの, すなわち, i, ia, ie, iao, iou, ian, in, iang, ing, iong が、第3行には、

(5) u, および u を最初にもつもの, すなわち, u, ua, uo, uai, uei, uan, uen, uang, ueng が、そして、第4行には、

- (6) ü, および ü を最初にもつもの, すなわち, ü, üe, üan, ün

がそれぞれ排列されている。これは、伝統的な音韻学を承けたもので、この第1行は、いわゆる「開口呼」、第2行は「齊齒呼」、第3行は「合口呼」、第4行は「撮口呼」にあたる。これを、主母音・介音・尾音によって表解すると、

主母音	介音 [註2]	尾音 [註1]				
		-i	-o, -u	-n	-ng	
a	i-	a [A]	ai [aɪ]	ao [ɑu]	an [an]	ang [ɑŋ]
	u-	ia [iA]	／	iao [iaU]	ian [ien]	iang [iaŋ]
	ü-	ua [uA]	uai [uai]	／	uan [uan]	uang [uaŋ]
		／	／	üan [yan]		
e, o [註3]	i-	{ e [ɛ] o (b-) [o°]	ei [ei]	ou [ou]	en [ɛn]	eng [ɛŋ]
	u-	uo [uo]	／	iou [i°u]	i(e)n [in]	i(e)ng [iŋ]
	ü-	／	uei [u°ɪ]	／	uen [u°n]	{ ueng [uɛŋ] (weng) ong [uŋ]
		／	／	／	ü(e)n [yn]	iong [yuŋ]
ê	i-	ê [ɛ]	この表で / を引いてあるのは理論的にも「韻母」がおこりえないところである。			
	u-	ie [ie]				
	ü-	üe [yɛ]				
(i) [註4]	i-	i (i̇) (z-) [ɪ] (zh-) [l]				
	u-	i (i̇) (j-) [i]				
	ü-	u (u̇) [u]				
		ü (ü̇) [y]				

となり、すべて韻母表の35種(êとziなどのiを加えて37種)となる。この35(または37)種が単独で音節を表記するばあいと、「声母」19種のあとに組みあわされたばあいとを総計すると、すべて423種にのぼる。その他、この辞典には、m, n, ng だけで音節をかたちづくるものや、yo のように「韻母表」等にもみえない綴りも採用されており、これらを加えると、すべて427種に達する。

[註1] 尾音は主母音のあとに加えられるもので -i, -o, -u; -n, -ng の5種しかない。そ

のうち、**-o** と **-u** とを一欄におさめたのは、本来おなじものであって、ただ **a** のあとでは **o**、**o** のあとでは **u** と表記されるにすぎないからである。

[註 2] 介音は声母と韻母とのあいだにおこる副母音で、**i-**、**u-**、**ü-** の 3 種しかない。このうち、**ü** は、**i** と **u** とがいっしょになったものである。**ün** が「声母」のないばあいには **yun** と綴られ、また、**i** の前にしか現われない **j**、**q**、**x** に付くばあいには **jun**、**qun**、**xun** と綴られるのは、そのためである。

[註 3] 主母音の列で **e** と **o** とを一欄におさめたのは、本来おなじものであって、**b**、**p**、**m**、**f** や **u** など唇を使用する音といっしょに用いられるばあいは **o**、そのほかのばあいは **e** と表記されるにすぎないからである。したがって、**ueng** も声母のないばあいは **weng** と表記されるが、そのほかのばあいは **-ong** と綴られる。**iong** に **o** が用いられるのは、**ü** が実は **i** と **u** とがいっしょになったものと考えられるからである。ただし、**uen** は、**n** が舌尖を用いる音であり、主母音がその影響で奥寄りの音にならず、**ue** とならんでも全体の発音が **o** に近くならないから、これを **-on** とは綴らない。その **uen** も声母があるばあいには、**e** の発音がそれほど顕著でないので、**un** と綴られる。それは **i(e)n**、**ü(e)n** のばあいに **e** がほとんどきこえないため、**e** を省くのとおなじやかたである。

[註 4] **zi** の **i** と **ji** の **i** とは「漢語拼音方案」ではそのちがいを「声母」によって区別するようになっているが、実はちがった母音である。歴史的にみると、両者はかつて同じ母音であったが、**zi** の **i** の方が、のちに、やや広めの、そして中舌寄りの母音 [ɿ] にかわり、齊歯呼でなくなったものであり、現代語の音韻の体系からみても、**ji** の **i** がこれに対する齊歯呼、**u** がこれに対する合口呼、**ü** がこれに対する撮口呼として、それぞれ配されるような性格をもっている。ただ **i**、**u**、**ü** は、音韻の体系のなかでこのような位置をしめるというだけのことであって、実際の発音は単母音であり、それぞれ典型的な張唇の前舌狭母音、円唇の奥舌狭母音、円唇の前舌狭母音である。

[註 5] 国際音声字母ではそれぞれ [ʐ]、[ʑ] と表わされるが、中国語学関係ではスウェーデン方言字母からかりた [ʐ] [ʑ] が通用している。

§7 中国語の「声母」は、その調音の器官と方法(調音点と調音法)とによって次のように表解される。

調音点 調音法		両唇音		齒茎音	硬口蓋音	齒擦音	齒茎硬口蓋音	軟口蓋音
		唇音	齒音	舌尖音	そり舌音	舌端音	舌面音	口蓋垂音
破裂音	無声無気	b [b]	d [d]					g [g]
	無声有気	p [p']	t [t']					k [k']
鼻音	有 声	m [m]	n [n]					
破擦音	無声無気				zh [dʒ]	z [dʒ]	j [dʒ]	
	無声有気				ch [ts']	c [ts']	q [tʃ']	
摩擦音	無 声	f [f]			sh [ʃ]	s [s]	x [ʃ]	h [x]
	有 声				r [ʒ]			
側面音	有 声			l [l]				

まず両唇音では、**b**、**p**、**m** の三つは上下の唇を破裂させ、唇齒音の **f** は上歯と下唇とを摩擦する。特に **b**、**p**、**m** のばあいの唇のとじかたは、日本語にくらべて強く、上下の唇のふれあう面積

がひろい。歯茎音（舌尖音）では、舌尖が歯茎のうち、特に上歯に近い部分にふれて、d, t, n, l の音を発し、硬口蓋音（そり舌音）では、舌尖を上にとらせ、これを硬口蓋にふれさせて、zh, ch, sh, r の音を発し、歯擦音（舌端音）では、舌端、すなわち舌尖よりやや奥寄りの部分を上歯の歯茎にふれさせて、z, c, s の音を発し、歯茎硬口蓋音（舌面音）では、舌面、すなわち舌端よりさらに奥寄りの、いわゆる前舌面をもちあがらせ、これを歯茎から硬口蓋にかかる部分にふれさせて、j, q, x の音を発し、軟口蓋音（舌根音）は、舌根、すなわち舌の奥の部分を軟口蓋にふれさせて、g, k の音を発し、また、口蓋垂音（舌根音）の h は舌根を軟口蓋や口蓋垂と摩擦して、発音する。以上、両唇音・唇歯音・歯茎音・硬口蓋音・歯擦音・歯茎硬口蓋音・軟口蓋音・口蓋垂音を通じ、これを調音の方法によって分類すると、両唇音の b, p と歯茎音の d, t と軟口蓋音の g, k とは、いずれも破裂音であり、両唇音の m と歯茎音の n とは鼻音であり、硬口蓋音の zh, ch と歯擦音の z, c と歯茎硬口蓋音の j, q とは、いずれも破擦音であり、唇歯音の f と硬口蓋音の sh, r と歯擦音の s と歯茎硬口蓋音の x と口蓋垂音の h とは摩擦音であり、歯茎音の l は側面音（また側音・流音ともいい、舌尖を軽く上の歯茎につけて、声を舌の両側から流出させる）である。また、この破裂音・鼻音・破擦音・摩擦音・側面音を通じ、それぞれ無声（声帯の振動しないもの）・有声（声帯の振動するもの）の区別がある。すなわち破裂音の b, p; d, t; g, k と破擦音の zh, ch; z, c; j, q と摩擦音の f; sh; s; x; h は、いずれも無声音であり、鼻音の m; n と摩擦音の r と側面音の l とは有声音である。また破裂音と破擦音とは無気と有気の別があって、破裂音の b, d, g と破擦音の zh, z, j は無気音で、破裂音の p, t, k と破擦音の ch, c, q は有気音である。無気音とは、破裂のあとに気音を伴わないもので、自然、破裂の直後に母音がつき、日本人にとっては、閉鎖をすこし強くした濁音（有声音）のようにきこえるが、実はあまり強い閉鎖があるのでなしに、後につづく母音が急速にはじまるだけのことである。また、有気音とは、破裂のあとに強い気音を伴うものである。日本語の清音（無声音）も、有気音であることが多いが、中国語の有気音は、はるかに強く、また長い気音があらわれる。なお、鼻音も、日本語にくらべて、両唇や舌尖の離れる速度がはやく、閉鎖のしかたも日本語より強い。

§8 中国語の「韻母」のうち、まず主母音は、舌の位置と口の形状（舌位と口形）とによって次のように表解される。

口形 \ 舌位	前舌母音	中舌母音	後舌母音
狭母音	i ü [i] [ɿ] [y]	i (ɨ) [ɨ] [ɿ]	u [u] [u]
半狭・半広母音	e [ɛ]	e [ə]	o [ɤ] [o] [ɔ]
広母音		a [a] [A] [ɑ]	

中でも、a, e, ê と i とは唇を丸めない音（張唇）であるに対し、o, u, ü はそれぞれ唇を丸める音（円唇）である。a は代表的な広母音 [A] であって、日本語のアよりも広く口をあけるが、-i, -n の前では前寄りの母音 [a], -o, -ng の前では後寄りの母音 [a], i- と -n との間では [ɛ] となる。o は奥寄りの半狭母音 [o] で、日本語のオよりも唇の丸めかたを強くして、唇を突きだすようにして発音するが、終りに近づくほど口のひらきが大きくなり、[ɔ] に近づく。したがって uo とならぶときは [uɔ] となり、ou とならぶときは [ou] となる。-ong, -iong の o は、実は -ueng, -üeng の ue, üe がいっしょになったもので、もっと狭い [u] である。e は唇を丸めず、日本語のウを発音するばあいの口を、ややひらいた形で発音する [ɤ]。これも -n, -i の前では前寄りの母音となり、-n では [ə], -i では [e] となる。ê は前寄りの半広母音 [ɛ] であって、日本語のエよりも広く口

をあける. ie, üe の e も, これと発音が同じである. i は前寄りの狭母音 [i] であって, 日本語のイよりも口を横にひいた音になり, u は奥寄りの狭母音 [u] で, 日本語のウとはちがって唇を丸めて突きだす形になる. i, u とも, 単独では典型的な狭母音であるが, a のような広い母音の後では, どちらもゆるんだ音 [ɨ] [ʊ] となる. ü は, i とおなじ位置の音であるが, 唇を丸めた口さきの音であり [y], 唇を縦に丸くすぼめた発音 (内的まるめ) と, 唇を横に細長くしめた発音 (外的まるめ) の2種がある. 以上のほか, そり舌音 zh, ch, sh, r のあとに単独で用いられる i と, 舌端音 z, c, s のあとに単独で用いられる i とは, 一般の前舌音の i とちがって, 中舌に近い音であり, そり舌音のばあいは zh, ch, sh, r のあとに, そのまま自然に出る母音 (摩擦のない継続音) [ɨ] であり, 舌端音のばあいは z, c, s のあとに, そのまま自然に出る母音 [ɨ] である. これら各種の母音を組みあわせたものに, 甲乙丙3類の複母音がある. 甲類とは, 広い母音から狭い母音にむかうもので,

ai [aɨ], ei [eɨ], ao [aʊ], ou [oʊ]

の4種があり, 乙類とは, 狭い母音から広い母音にむかうもので, これには

ia [iA], ie [iɛ]; ua [uA], uo [uɔ]; üe [yɛ]

のように, i のつくものが2種, u のつくものが2種, それに ü のつくものが1種, 計5種あり, 丙類とは狭い母音にはじまり, 広い母音をへて, また狭い母音にもどるもので, これにも,

iao [iaʊ], iou [iʰu]; uai [uaɨ], uei [uʰɨ]

のように, i にはじまるものと u にはじまるものがそれぞれ2種, 計4種ある. また, 以上の母音のあとに, 鼻音 n, ng を伴うことがあって, n については

an [an], en [ən]; ian [iɛn], in [in]; uan [uan], uen [uʰn]; üan [yan], ün [yn]

の8種, ng については

ang [aŋ], eng [ɛŋ]; iang [iaŋ], ing [iŋ]; uang [uaŋ], ueng [uɛŋ], ong [ʊŋ]; iong [yʊŋ]

の8種がみとめられる. n のばあいは上歯の歯茎で調音されて, 口が窄せまくなり[註1], ng のばあいは軟口蓋で調音されて, 口が寛ひろくなるので, それぞれ「窄音」「寛音」とも呼ばれる[註2]. 「漢語拼音方案」の注意(2)にみえる er [ɛɹ] は e のあとで舌尖を軽くまきあげる音節であるが, それは, 「声母」と組みあわされることなく, つねに単独で用いられる. しかし, おなじ注意(2)にある huar のような, いわゆる「r化」の現象(音節の最後に r が加えられること)は, ほとんどすべての音節を通じてみられる. これを表解すると, 次の表のようになる.

主 母音		儿化尾音		-r	-or, -ur	-ngr	
		介 音	尾 音				
a			-i	a + r	ao + r [aʊɹ]	ang + r [aŋɹ]	
			-n	ai + r			
			-n	an + r			
	i-			-i	ia + r	iao + r [iaʊɹ]	iang + r [iaŋɹ]
				-n	ian + r		
				-i	/		
				-n	ian + r		
	u-			-i	ua + r		uang + r [uaŋɹ]
				-n	uai + r		
				-i	uan + r		
				-n	uan + r		
	ü-			-i	/		
-n				/			
-i				üan + r			
-n				üan + r			

e, o			$\left. \begin{array}{l} e + r \\ er \\ o(b-) + r \end{array} \right\} \left. \begin{array}{l} [ɛr] \\ [or] \end{array} \right\}$	ou + r [ouɹ]	eng + r [ɛŋɹ]
	i-	(-i) -n	$\left. \begin{array}{l} ie + r \\ i(j-)^{3,4} + r \\ i(e)n^{3,4} + r \end{array} \right\} [iɛɹ]$	iou + r [i ^o uɹ]	i(e)ng + r [iɛŋɹ]
	u-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} uo + r \\ / \\ / \end{array} \right\} [uoɹ]$		ueng + r [uɛŋɹ] ong + r [õŋɹ]
	ü-	(-i) -n	$\left. \begin{array}{l} üe + r \\ ü^{3,4} + r \\ ü(e)n^{3,4} + r \end{array} \right\} [yøɹ]$		iong + r [yõŋɹ]
e		-i -n	$\left. \begin{array}{l} i(z-) + r \\ ei + r \\ en + r \end{array} \right\} [eɹ]$	ü ^{1,2} または ü ^{3,4} のように 1. 2. 3. 4 の数字を右肩に加えたのは、1. 2 声のときと 3. 4 声のときとで発音に差のあることをしめす。それは、3. 4 声のばあいは 1. 2 声のばあいに認められないあいまいな母音が附加されるからである。	
	i-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} / \\ / \\ / \end{array} \right\}$		
	u-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} / \\ uei + r \\ uen + r \end{array} \right\} [uɛɹ]$		
	ü-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} / \\ / \\ / \end{array} \right\}$		
(i)		-i -n	$\left. \begin{array}{l} / \\ / \\ / \end{array} \right\}$		
	i-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} i(j-)^{1,2} + r \\ / \\ i(e)n^{1,2} + r \end{array} \right\} [iɹ]$		
	u-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} u + r \\ / \\ / \end{array} \right\} [uɹ]$		
	ü-	-i -n	$\left. \begin{array}{l} ü^{1,2} + r \\ / \\ ü(e)n^{1,2} + r \end{array} \right\} [yɹ]$		

なかでも -r の列では、基本の音節が -i, -n に終るものは、その -i, -n が発音されないという現象が顕著であるが、-or, -ur の列では格別の変化がなく、-ngr の列では、-ng が消えて、母音の鼻音化の要素としてしか残らないという変化がおこる。

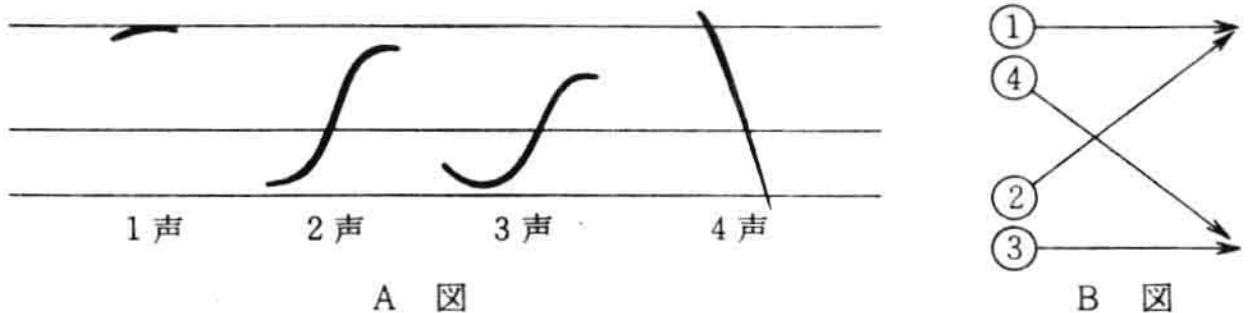
[註 1] -n は内破音であって、舌尖が歯茎の全面にわたって閉鎖を完成するために口蓋化された形になる。

[註 2] -n, -ng は先行する母音に影響をおよぼし、-n の前には前寄りの母音が、-ng の前には奥寄りの母音が出る。

§9 以上の「声母」と「韻母」とが結合するばあいには、自然に一定の制限があつて、歯茎硬口蓋音 *j, q, x* は *i, ü* (実は *u* と表記される) 以外の「韻母」と組みあわされることがなく、ちょうどその裏がえしとして、軟口蓋音 *g, k* と口蓋垂音 *h* は *i, ü* の韻母と組みあわされることがない。また、硬口蓋音と歯擦音、すなわち *zh, ch, sh, r; z, c, s* も、そのあとにそのまま自然に出る *i* (音韻としては *ɿ*) を除いて、*i, ü* の韻母と組みあわされることがない。 *iou, uei, uen* が声母と組みあわされるときは、*o, e* があいまいな形になり、自然、*-iu, -ui, -un* のように綴られるが、これらが単用されたばあいは、*iou* の *o, uei, uen* の *e* が顕著であり、すなわち *you, wei, wen* と綴られる。また *ueng* は、常に単用されるので、*weng* という綴りしか存在しないし、*ong* はかならず「声母」と結合するので、「声母」のつかない *ong* という音節は存在しない (§6 参照)。 *ê* と *er* とは、常に単用され、「声母」と結合されない。また唇音の *b, p, m, f* には主として *o* が組みあわされ、歯茎音の *d, t, n, l*、軟口蓋音の *g, k* と口蓋垂音 *h*、硬口蓋音の *zh, ch, sh, r*、歯擦音の *z, c, s* には主として *e* が組みあわされる [註]。

[註] *b, p, m, f* は *bo, po, mo, fo* となつて *be, pe, me, fe* とはならず、*d, t, n, l* などば *de, te, ne, le* となつて、*do, to, no, lo* とならない。

§10 中国語における4種の「声調」、すなわち「四声」は、主として高さアクセントであつて、「陰平」すなわち1声は高く平らであり、「陽平」すなわち2声は低いところから急にのぼり、「上声」すなわち3声は低いところでゆっくりしており、「去声」すなわち4声は高いところから急にさがる。「陰平・陽平・上声・去声」とは、その歴史的な名称であり、これを1声・2声・3声・4声と略称する。いま物理実験の結果によって高さの差を示すと、A図のような形となるが、その基本的な特徴は、B図に示すような均齊のとれた対立である。一般に「声調」は、すべての音節



に内在して、意味の区別に役だつものであつて、全音節数 427 にたいし、理論的にはその4倍にあたる 1708 種の区別が可能であるが、実際には、一つの音節で4種の「声調」を具備しないものがあつて、意味の区別として使用されているのは、およそ 1300 種である。以上は単音節のばあいであるが、二つ以上の音節をつらねて1語としたばあいは、そのあいだに強弱の差を生ずることがあつて、その強い部分は、原則として固有の声調のままであるが、弱い部分は、主としてこれに先行する音節の声調に支配される。このようなものを普通に「軽声」と名づける。この「軽声」にも、固有の「声調」をほとんど失つたものと、なおある程度これを保留しているものがあるが、あらまし、1声・4声のあとでは低くなり、2声のあとでは中ぐらいで、3声のあとでは高くなる。3声は低い声調であつて、その音節を二つ以上かさねて同様に発音することは困難であるから、そのばあいは、原則として先行の3声か、ほとんど2声のような形をとる。しかし、この辞典では、このばあい、すべて3声の「声調符号」を加え、変調は示していない。また、4声は高いところから急にさがる声調であつて、自然、その音節をかさねるときにも、先行の4声か、これもほとんど2声のような形をとることがある。そのいちじるしいのは *búshì* (不是) の *bú* (不) と *yíge* (一个) の *yí* (一) および *qíge*

(七个) *báge* (八个) の *qí* (七) *bá* (八) であり、これらについては、この辞典でも変調を示した。なお、これらの変調は1語のなかだけでなしに、2語以上つづけて発音するばあいにもおこる。ただし、固有の声調が、たとえば、ともに3声であっても、あとにつづく音節が「軽声」であるばあいには、このような変調がおこらない[註]。

[註] 一つの語が文のなかに用いられたとき、文の硬さ軟かさに応じて、「軽声」の程度に変化のおこることがある。たとえば、*guānxi* (关系) という語が普通の会話で用いられるときは、*xi* は「軽声」になるが、もし *guānxi zhòngdà!* (关系重大) のようにおもおしく発言されるときは「軽声」化しない。この辞典ではこれらの差についていちいち取りあげていない。

漢 字

§ 11 中国語の正書法には、現在のところ、習慣として、漢字が用いられている。漢字は、原則として、中国語の一つの音節があらわす意味を、一つの形に写したものであって、本来、意味に直結し、その限りにおいて、読みかた、すなわち音を持っている。しかし、漢字とその音とは、意味のように直結することがなく、おなじ意味でも、地方によって音を異にするばあいは、ちがった読みかたがあたえられる。この辞典で言う漢字の読みかたとは、中国の標準語ないし北京方言で一般にみとめられているものである。漢字の総数は、およそ40000あまりといわれるが、1932年に「教育部国語統一籌備委員会」で審定した「国音常用字彙」には、およそ9000字を収録してある。それにしても、現在の中国語の音節427種、これに「四声」を乗じたおよそ1300種に比し、約7倍にのぼっており、*yi* の「去声」などは、85の漢字と8個の異体字をおさめている。それらのなかには歴史的な語彙が多数保存され、漢字はまた、多くはそのためが発生する同音異義語を識別するものとして、重要な意味をもつが、またそのために、いちいち形の差別を示さなければならず、自然、その形はいよいよ複雑にならざるをえない。しかも、おなじ漢字は、ながい歴史において種種の「異体字」ないし「簡体字」を派生し、これを学習し筆写するには多大の労力を必要としている。中華人民共和国では、この点にも注意をはらい、1955年の「全国文字改革会議」で、515(のちに517ときめた)の漢字についてその「簡体字」を審定し、これを一般に通用せしめている。この辞典では、それぞれの語彙について、それぞれの音節に相当する漢字を注記してあるが、この517字については、これを本字とし、これに従来の「繁体字」を付記した。中国の「簡体字」は、今後いよいよ増加の傾向にあり、現に、あらゆる漢字を10画以内にちぢめようという企てが進行しており、将来は、いっそうの「簡化」が実現するものと予想される。

中国語の語彙

§ 12 中国語は、本来、単音節的な言語であるが、現在使用されている単語の大部分は複音節であり、特に2音節から成るものが多い。これらの語彙を通じてみたとき、たとえば、*nǐ* (你), *gǒu* (狗), *lái* (来), *hóng* (紅) または *bōli* (玻璃), *luóbo* (萝卜) のように、これ以上こまかい要素に分析できないものもあるが、また、*lǎoshǔ* (老鼠) または *gútou* (骨头), *yǐba* (尾巴) のように、語幹と接辞[註1] とに分析できるものもあり、*lái-huí* (来回), *chénggōng* (成功) のように、二つの語幹に分析できるものもある。この辞典は、これらの語彙を、できるだけ収録した。もっとも、それぞれの語彙については、それが一つの単語であるかどうか判別しにくいものが少なくない。この辞典では、それぞれの語彙が文のなかに用いられたときに、これをローマ字で表記して、一綴りになるべきものを、一つの単語とみとめた。なかでも、*bàngōng* (办公), *lādùz* (拉肚子) のように、動詞とその補語になる名詞とを一綴りにしたのものには、*bàngōng*, *lādùz* のように、₁を加え、両者が本来分離できるものであることを示した[註2]。これとともに、3音節以上の単語で、容易に、もっと小さい要素に分析できるものは、往往省略した。それは、それぞれの小さい要素についてみることができるからである。また、*-le* (了), *-zhe* (着) などが動詞のあとに付属する現象は、きわめて多数の動詞について発

生するので、これをいちいちあげることしなかった。同様に、動詞のあとに *-lái* (来), *-qù* (去) その他が付属するばあいも、少数の例をあげるにとどめた。動詞のあとに *-deqǐ* (得起), *-buliǎo* (不了) などが付属するものは、やや多く収録したが、決して網羅されてはいない。それは、大体、類推ができるからである。その代わりとして、*-le* (了), *-zhe* (着), *-lái* (来), *-qù* (去), *-deqǐ* (得起), *-buliǎo* (不了) などを、見出し語の中に採録して、その用法を説明した。ただ、これらは、一つの単語とはみとめられないので、品詞の標識はほどこさなかった。同様に、たとえば *bāngmáng* (帮忙) の *máng* などは文のなかでたまたま一綴りになることもあるが、これは *bāngmáng* の成分とみとめ、品詞の別をたてず、ただ“*bāngmáng* を見よ”という意味の標識をほどこした〔註 3〕。

〔註 1〕 接辞には接頭辞と接尾辞とあるが、中国語では接頭辞の例がきわめて少ない。

〔註 2〕 この標識は、語彙の成分を示すため便宜的に加えただけのもので、正式のローマ字綴りに、これを加えてはならない。また、それは、しばらく、動詞にのみ加えておいた。

〔註 3〕 本文の *máng* (忙) の条に () → *bāngmáng* (帮忙) とあるのがそれである。

§ 13 以上の語彙は、それぞれ一定の意味と音とをそなえ、また一定の機能をもって文の中に使用されているので、これを品詞に類別する。中国語には、語形の変化などの現象がなく、品詞の決定には、かなりの困難はあるが、この辞典では、いちおう次の 11 品詞を立てた。

- | | | | | | |
|--------|-------|-------|---------|---------|--------|
| 1. 指示詞 | 2. 数詞 | 3. 量詞 | 4. 名詞 | 5. 動詞 | 6. 形容詞 |
| 7. 副詞 | 8. 介詞 | 9. 助詞 | 10. 接続詞 | 11. 間投詞 | |

ほかに擬音擬態語があるが、これは品詞にかぞえない〔註〕。

〔註〕 以上のうち、主として名詞(これに数詞・量詞および指示詞の一部を加えて)を“体言”といい、主として動詞・形容詞を“用言”ということもある。これには、中国の伝統的ないかたの「実詞」「虚詞」がある程度の関係をもっている。

§ 14 指示詞とは、ひろく、人・物事・場所・時間ないし、物事の性状・方法・程度などについて、それぞれの具体的な名称などの代わりになって、それらを指示することばである。これには、いわゆる人称代名詞にあたる *wǒ* (我), *nǐ* (你), *tā* (他) もあり、人や物事を指示する *zhè* (这), *nà* (那) もあり、場所を指示する *zhèr* (这儿), *nàr* (那儿) もあり、時間を指示する *zhèhuǐr* (这会儿), *nàhuǐr* (那会儿) もあり、性状・方法・程度などを指示する *zhème* (这么), *nàme* (那么), *zhèyàng* (这样), *nàyàng* (那样) もあるし、また、それらの不定の形として、*shéi* (誰), *nǎ* (哪), *shénme* (什么), *nǎr* (哪儿), *duózan* (多啗), *nǎyàng* (哪样), *zěnmé* (怎么), *zěnyàng* (怎样) などもある。この不定の形は、同時に“だれでも”“なんでも”“いつでも”といった、一切をふくむばあいにも使用される。指示詞は、きわめて少ない例のほか、他のことばによって修飾されることがない。また、人や物事・場所・時間を指示するものは、名詞のような性格をおびているに反し、性状・方法・程度を指示するものは、多く形容詞・副詞などの性格をおびる。正確な意味での複数は、*wǒmen* (我們), *nǐmen* (你們), *tāmen* (他們) の *-men* によって表示されるが、特に人間以外にたいしては *-men* を用いない。しかも、*-men* のないことばは、かならずしも単数とは限らず、複数を特に表出する必要のないときは、たとい実際に複数であっても、*-men* を加えないことがあるし、*-men* があっても複数とは限らないこともある〔註 1〕。また人間以外にたいしては *tā* を用いない〔註 2〕。敬称には *nín* (您) があるが、それは複数を示す *nǐmen* から定着したものである。三人称の性別も、西洋語の影響によって、漢字では表記しわけけるが、発音には区別がないし、格変化とみとむべきものもない。*zhè* と *nà* とは、近称(これ)・遠称(あれ)を区別するが、中称(それ)に相当するものはない。

〔註 1〕 *yémenr* (爷們儿), *niángmenr* (娘們儿) など。

〔註 2〕 *tā* を人間以外に使用するのは西洋風のいいかたの影響である。ただ前にあることばを受けて *bǎ tā rēng le ba* (把它扔了吧) というようなばあいだけは、中国語自体の習慣として、無生物にも *tā* を用いる。

§ 15 数詞には、いわゆる基数詞のほか、概数をあらわす *lái* (来), *sānsì* (三四), 序数をあらわ

す **dì** (第) などがあって、数学的に用いられるばあいを除いては、多く量詞を伴う。特に“二”については、数学的なばあいは **èr** (二) で、量詞を伴うばあいは多く **liǎng** (兩) が使用される。量詞は、多く、数詞のあとにあらわれて、これとともに用いられ、また、しばしば、そのあとに名詞をおいて、その名詞の数量を示す。量詞には、人または物事の量をいうものと、動作の量をいうもののがあって、それぞれ名詞または動詞に関して使用される。量詞は、また **zhè** (这), **nà** (那) など指示詞のあとにあらわれて、これとともに用いられ、時には、指示詞のあとに数詞+量詞の形であらわれることもある。 **zhè**, **nà** が直接、量詞の前に立ったときは、量詞の直前にあるべき数詞の **yī** (一) が略されたものと見る事ができるし、文の途中では、数詞 **yī** を略した **gè** (个) などの量詞が、はだかで使用される例が多い。量詞には、普通に人または物事の量をいう **gè** (个), **jiàn** (件), **zhī** (只), **tiáo** (条), **bǎ** (把), **jù** (句), **duī** (堆) などのほか、度量衡や時間・貨幣の単位などをいう **chǐ** (尺), **cùn** (寸), **dǒu** (斗), **shēng** (升), **jīn** (斤), **liǎng** (兩), **diǎn** (点), **fēn** (分), **kuài** (块), **máo** (毛) などのことばもある。数量の単位がいくつか重なるばあいには、たとえば **yīqiān wǔ** (一千五) といって“千五百”を示し、**bāchǐ sān** (八尺三) といって“八尺三寸”を示し、**liǎngkuài wǔ** (两块五) といって“二円五十銭”を示すような省略がおこなわれる。ただし、単位を示すものと動詞に関するものについては、**yī** (一) を省略することはない[註]。はっきりした単位を示すものではなくて、たとえば、**yīwǎn fàn** (一碗飯), **liǎngzhōng jiǔ** (两盅酒) のように、器物などが臨時の量詞となることもある。ただ、**yīzhuō cài** (一桌菜) といえ、料理屋に一テーブルとして注文したという意味の正式の量詞であるが、**yīzhuō zǐ cài** (一桌子菜) といえ、テーブル一杯の料理という意味で、臨時の量詞であり、このばあいには数詞+量詞と名詞とのあいだに助詞 **de** を挿入することがある。

[註] 古典には「尺五」のような用法がある。

§ 16 名詞は、中国語の絶対多数を占めているが、一般に、複数表現もなく、格や性による変化もない。ただ、人を示す名詞には、たとえば **péngyoumen** (朋友們) のように、**-men** を加えて複数を示すこともある。しかし、数詞その他によって複数であることが示されたばあいには、**-men** を加えてはならない。名詞には、広くいって、固有名詞もあるが、この辞典には正式に収録せず、巻末に、常用されるもの若干をあげるに止めた。なお、固有名詞をふくんだ単語は、少数に限りとりあげた[註 1]。名詞には、また、時間を示すもの、方位を示すもののがあって、時には、時間詞・方位詞などと呼ばれる。時間を示すものには、ある時点を示す **zuótiān** (昨天) のようなものと、ある時間の長さを示す **bàntiān** (半天) のようなもののがあり、原則的には、前者は動詞の前におかれ、後者は動詞のあとにおかれる。方位を示すものには、**dōng** (东), **xī** (西) のように方角をさすものと、**shàng** (上), **xià** (下), **qián** (前), **hòu** (后), **lǐ** (里), **wài** (外) などのように位置をさすものがある。位置をさすものうち、上例のような、きわめて単純なものは、多く単独に用いられず、名詞のあとに付属するか、**-biānr** (边儿), **-miàn** (面) または **-tōu** (头) を伴った形をとって独立する。単純な方位を示すことばが単独に用いられるのは、大体、**wǎng xià kàn** (往下看), **cóng dōng lái** (从东来) のように、介詞のあとにおかれた時が多い。一般に、名詞は、ある基本の形、たとえば **bǎn** (板) にたいし、**bǎnr** (板儿) または **bǎnz** (板子) のように、**-r** または **-z** を加えることがある[註 2]。そのばあいにも、意味に変化のないものと、変化をおこすもののがあって、この辞典では、いちいちの場で取りあげた。ただ、2音節以上の名詞については、繁をさけて、ひとまとめに記述した。

[註 1] **zhōngguóhuà** (中国話) はその 1 例であるが、本文では固有名詞をおさめないたちばから、その例文では、かりに **zhōngguó-huà** のように表記した。しかし、一般にはそのような表記をする必要がないので、序説の中ではハイフンを使用しない。

[註 2] 動詞にも **děngděngr** (等等儿) のように、また副詞にも **hǎohāor(de)** (好好儿(的)) のように **-r** を加えるものがあるが、名詞に比べてはきわめて少数である。

§ 17 動詞は、**ná** (拿), **lái** (来) などのように、人または物事の動き、すなわち、主として一時的

な属性を示すものであるが、便宜上、**yǒu** (有), **zài** (在), **xiàng** (像) など、恒久的ないし半恒久的な属性を示すものをも包含する。中国語の動詞は、本来、テンスにもアスペクトにも関係なく、また主語との呼応もなく、まったく動作だけを示すものであるから、たとえば **lái** (来), **qù** (去) といっても、**zuò fàn** (做饭), **shàng xué** (上学) といっても、特定の、具体的な、現実化した動作や状態は示さない[註 1]。ただ、そのあとに一種の動詞または形容詞などが付属すると、特定の、具体的な、現実化した動作や状態を示すことになる。それには、(1) 動詞のあとに、元來動詞から来た **-le** (了) を付属して、その動作の完了したことを示し、おなじく **-zhe** (着) を付属して、その動作が継続していることを示すものと、(2) 動詞のあとに、元來動詞から来た **-lái** (来), **-qù** (去), または、**-lái**, **-qù** が **-shàng** (上), **-xià** (下), **-jìn** (进), **-chū** (出), **-guò** (过), **-qǐ** (起), **-huí** (回) などのあとに結びついたものを付属して、その動作の方向を示すものと、(3) 動詞のあとに、**-wán** (完), **-kāi** (开), **-zài** (在), **-dào** (到), **-zhù** (住), **-cuò** (錯), **-dǒng** (懂), **-zháo** (着), **-huì** (会), **-hǎo** (好), **-qīngchū** (清楚), **-míngbai** (明白) などを付属して、その動作の結果を示すものと、(4) 動詞のあとに、**-de** (得) を付属して、たとえば **xiěde tài hǎo** (写得再好) というように、その動作の程度を示すものと、(5) 動詞のあとに、たとえば **-deliǎo** (得了), **-buliǎo** (不了), **-deqǐ** (得起), **-búshàng** (不上), **-dezhù** (得住), **-búxià** (不下), **-dehǎo** (得好), **-búdǒng** (不懂) などを付属して、**xiědeliǎo** (写得得了), **kànbuliǎo** (看不了) などのように、その動作がある結果に達し、または方向をとることの可能か否かを示すものがある[註 2]。以上のうち(2)の方向を示すものは、付属する力がよわく、**náchū qián lái** (拿出錢来) や **mǎile huílai** (买了回来) のように分離もできるが、その他のものは、絶対に分離できない。なお、(4)の程度を示すものは、かならず、ひきつづいて、その程度をいう形容詞などを述べなければならぬ。おなじ動詞を二つかさねていうと、動作をちょっとやってみるといった、やわらかい表現になる。これには **kànkàn** (看看), **děng-yideng** (等一等), **děngděngr** (等等儿)[註 3], **kànle-kàn** (看了看), **kànle-yíkàn** (看了一眼) などのいいかたがあるが、元來 2 音節から成る動詞は、**shíduoshíduo** (拾掇拾掇) のような形になって、**yī** (一) や **le** (了) は挿入されない。動詞の否定には **bù** (不) と **méi** (没) の二つの形式があって、前者は、特定または具体的でなく、現実化しない動作のばあい用いられ、後者は、特定の、具体的な、現実化した動作のばあい用いられる。

[註 1] 動詞だけで示されることは、(1) その動作をするかどうかというときと、(2) 習慣になった動作または動作によってあらわされる状態との二つであって、前者は **nǐ lái-bulai?** (你来不来), 後者は **niǎor fēi**, **gǒu pǎo** (鸟儿飞, 狗跑), **wǒmen měitiān shàng xué** (我們每天上学) などが、その例である。

[註 2] **qǐ**, **shàng**, **xià** などのばあいは更に方向を示す **-lái** (来), **-qù** (去) を加えることがある。

[註 3] この形は例が多くない。

§ 18 形容詞は、人や物事の性質・状態など、その恒久的ないし半恒久的な属性をあらわす。形容詞には、動詞のように文の述語として用いられるものと、名詞の修飾語にしか用いられないものがある。この辞典で、形容詞の訳語に日本語の終止形を全然使用していないばあいは、修飾語にしか用いられないことを示したものである。もちろん、すべての形容詞は修飾語となることができ、さらに抽象名詞として考えることもできるが、それはいちいち取りあげていない。文の述語には、単音節の形容詞[註]だけでは使用されず、**hěn dà** (很大) のように副詞を加えた形が普通である。ただし、二つのものの性状を比較したばあいならば、単音節の形容詞も使用できる。形容詞が名詞を修飾するときも、普通は **hěn hǎo de shū** (很好的书) のように、複雑な構造をとる。**hǎode shū** (好的书) というばあいもあるが、そのときは、他のものと比較したり区別したりする意識が加わっている。すべて複雑な構造のばあいは、名詞とのあいだに、かならず **de** を用いるが、**duō** (多) と **shǎo** (少) だけは例外で、**hěn duō rén** (很多人) などということができる。また、単音節の形容詞が名詞を修飾するばあいは、大体、特定の語にかぎられ、むしろ、あわせて一語とみとめられるが、この辞典

は、このような語をいちいち採録していない。元来の形容詞にも、いちおう **le** (了) を加える形はあるが、この辞典では、多く動詞として処置した。また、形容詞も、そのあとに **-de** (得) を付属して、その程度をいうことができる。特に他のものと比較して“ずっと”“はるかに”という意味で、たとえば **hǎode hěn** (好得很), **kuàide duō** (快得多) のようにいうこともあるが、あとに出る形容詞は **hěn** と **duō** の2種に限られる。おなじ形容詞を二つかさねていうと、意味をつよめた表現になるが、これにも、**hǎohǎor(de)** (好好儿的) のように単音節をかさねるばかりのほか、2音節語については **míngmíngbáibái** (明明白白), **gāngānjìngjìng** (干干净净) のようなかさねかたをするものと、**bīngliángbīngliáng** (冰凉冰凉) のようなかさねかたをするものがある。また、**húlihútu** (胡里胡涂), **shǎllshǎqi** (傻里傻气) のようにいう特殊な表現もある。形容詞の否定は **bù** (不) だけで、**méi** (没) は用いられない。

[註] 単音節ではないが、**gānjìng** (干净), **jiēshi** (结实) のように、分解することができない形容詞も同様である。

§ 19 副詞は、動作や状態などの程度・範囲または否定を示すもので、常に、動詞・形容詞の前に来て、これを修飾する。一般には、文の中で単用することがない。その代表的なものは、**yě** (也), **yòu** (又), **kě** (可), **cái** (才), **zài** (再), **jiù** (就), **hái** (还), **dào** (倒), **dōu** (都), **hěn** (很) などの単音節詞であるが、別に、**yào** (要), **néng** (能), **kěyǐ** (可以), **yīnggāi** (应该) など、動詞的な性格をもつものや、**xìngkuī** (幸亏), **hǎozài** (好在), **dāngrán** (当然), **yídìng** (一定) など、接続詞に近い性格をもって、文の中でその前後にくぎりをおくことができるとともに、主語の前にも立ち得るものがあり、また、**bù** (不), **méi** (没) など否定を示すものがある。中でも、接続詞に近い類の **yěxǔ** (也许) などは、一語で文になることもある。なお、接続詞に近い類の副詞は、大体、複音節である。

§ 20 介詞という名称は、名詞(または指示詞)を動詞・形容詞に“紹介する”という意味である。元来は、補語をとり得る動詞であるが、普通、それ自身の補語を伴った構造で、動詞・形容詞の上に立ってこれを修飾し、時間・場所・方式・目的などの関係を示す。これには、**zài jiā chī** (在家吃) の **zài**, **cóng dōng lái** (从东来) の **cóng** のように、場所や時間をあらわすもの、**ná kuàiz chī** (拿筷子吃) の **ná** のように、方法をあらわすもの、**gěi tā dǎsǐ** (给他打死) の **gěi**, **ràng tā qù** (让他去) の **ràng** のように、受け身や使役をあらわすもの、**bǐ tā dà 1 suì** (比他大一岁) の **bǐ** のように比較をあらわすもの、**wèizhe héping nǔlì** (为着和平努力) の **wèizhe** のように目的をあらわすものなどがあるが、その大部分は単音節である。

§ 21 助詞は、大体、文末におかれ、話し手の感情や語気をあらわす。その種類は多くないが、**a** (啊), **la** (啦), **na** (哪), **ba** (吧), **ma** (嗎), **de** (的) など、きわめて頻繁に使用される。普通は単音節であり、また軽声である。

§ 22 接続詞は、二つ以上の語または文を接続するもので、文と文とを接続する **kěshì** (可是), **érqǐè** (而且), **rúguǒ** (如果) などは、文の中で、その前後にくぎりをおくことができる。

§ 23 間投詞は、文の中の他の語とのあいだに、一切の文法的関係を持たず、常に孤立して、語気や感情をあらわすものである。それは、感情を直接表現していて、叙述性や描写性がなく、それだけでは、その内容も十分あきらかでないため、これにつづく文の中で、その説明を加えるようなことが多い。その発声の調子は複雑であるから、この辞典では、間投詞に「声調符号」をほどこすことをひかえた。間投詞はまた、**āle 1 shēng** (啊了一声) のように動詞の位置におかれることもある。間投詞は話し手という人間の発声であるが、声や音や状態などを音声の力をかりて描出したものは、特に擬音擬態語といい、これまた「声調符号」をほどこしてない。

§ 24 中国語の語彙は、それぞれの硬度をもって使用される。たとえば、動詞 **dǎ** (打) はきわめて普通の硬度をもったことばで、いわば“たたく”に相当する。そのおなじ動作を、もし **zòu** (揍) といえ、それは、いわば“ぶつ”といったようなものであって、硬度のよわいものといえるが、通用する範